慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ナボコフの二重生活 : 『セバスチャン・ナイトの真実の生涯』に見る言語的情事
Sub Title	Nabokov's double life : affairs with languages in The real life of Sebastian Knight
Author	内田, 大貴(Uchida, Daiki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2019
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.116, (2019. 6) ,p.247 (18)- 264 (1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01160001-0247

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ナボコフの二重生活
――『セバスチャン・ナイトの真実の生涯』に見る言語的情事

内田　大貴

序

亡命ロシア人作家ウラジーミル・ナボコフ（1899–1977）は、1940年に迫り来るナチスドイツのパリ侵攻をかろうじて逃れるかたちで、ヨーロッパからアメリカへと亡命し、それまでの約40年間のロシア語作家時代に幕を下ろし、英語作家として新天地で一からやり直しを迫られた。そして、英語時代のナボコフは『ロリータ』や『青白い炎』によって、見事成功を収め、世界的に知られ、アメリカ文学史にも名を残す地位にまでたどり着いた。ナボコフはアメリカへと亡命した直後、危機を脱した安堵を友人への手紙で見せている。アメリカへ来たばかりで依然として「何をやっても功を奏さず、未だに何も決まっていません。腹立たしい限り」だと不満を述べながらも、しかし、少なくとも身体的安全と創作の自由が保証されるアメリカは、彼にとってヨーロッパと比べれば、「ここはまったくの極楽」（*Selected Letters* 33）だった。

ナボコフが英語圏への亡命を考え始めたのは、1930年代半ばのベルリン時代だ。ユダヤ人の妻ヴェーラと息子ドミトリイと暮らすさなか、ナチスの台頭により徐々に雲行きの怪しくなっていたドイツ国内の政治情勢を感じ取っていた。ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジを卒業していたナボコフの希望は当初、イギリスの大学での文学講師としてのポストだった。しかし、それが難しいと知ると、イギリスか、もしくはアメリカでの教職を探し求める。ナチスの人種政策の脅威に、移住の必要性を強く感じながらも、一方で英語圏への移住に対して、ロシア語作家としてキャリアを積んできたナボコフは少なからず不安感を抱いてい

た。周囲が英語ばかりを話す国において、ナボコフはそれまで磨き上げてきた自身のロシア語を十全に保持することができるのかという疑問、また英語作家として身を立てることができるのかという懸念を抱えていたからだ（Boyd 495）。このころナボコフは、自身のロシア時代の英語での素描を試みており、そのスケッチは*A Russian's Early Association with England*というタイトルだった。のちにその一部は自伝的小説『記憶よ、語れ』（1951）と、『セバスチャン・ナイトの真実の生涯』（1941）（以下『セバスチャン・ナイト』）へと発展する（Boyd 420, 435）。

ロシア語喪失がナボコフにもたらした衝撃は大きかった。1920年代から1930年代のベルリンでの亡命ロシア人コミュニティにおいて、ナボコフはロシア語作家「ウラジーミル・シーリン」としてすでに極めて高い評価を受け、新しい世代のロシア文学の旗手として、ロシア人初のノーベル文学賞受賞者であるイヴァン・ブーニンからさえ妬みを買うほどの名声を得ていた。ロシア文学研究者であり、亡命ロシア人コミュニティの仲間でもあったグレーブ・ストルーヴェは、ナボコフのことを「若い世代のロシア人作家の中で最も独創的で最も優れた技巧を持つのは、疑いようもなくウラジーミル・シーリンだ」と評した（Struve 47; 訳は筆者による）。同じく亡命ロシア人詩人であるニーナ・ベルベーロヴァは、シーリンが「偉大なロシアの作家」であり、シーリンの存在によって、「これからの私たちの存在は意味を持った。私たちは救われた」(Berberova 225; 訳は筆者による)と評価した。このことからも明らかな通り、亡命ロシア人コミュニティにおいて、ロシア国外ではありながらも、当時のロシアを代表するもっとも優れた作家として、ナボコフはすでに評価を受けていた。

いまだロシア語作家シーリンであった時代に、ナボコフは『セバスチャン・ナイト』を英語による最初の作品として書き上げた。1938年にパリで、まさにナボコフがロシア語作家としてのキャリアを諦め、英語作家へと転身を果たそうかという時に、イギリスのある文学賞に投稿されるために足早に執筆された（Boyd 496）。

『セバスチャン・ナイト』は語り手Vが、異母兄ですでに故人であり、5つの英語作品を残した作家セバスチャン・ナイト（1899–1936）の人生をたどる過程を語った擬似伝記作品だ。Vとセバスチャンは父親は同じだが、Vの母親はロシア人、セバスチャンの母親はイギリス人ヴァージニア・ナイトであり、したがっ

てセバスチャンはロシア人とイギリス人のハーフである。母親の姓ナイトを名乗り、英語で作品を残していることからも明らかなように、彼はイギリス人として生きることを選んだ。Vは兄でありながらも、セバスチャンがどのような生涯を送ったのか、疎遠な関係にあったために詳しい知識は持たない。しかしながら、セバスチャンの元秘書グッドマン氏による『セバスチャン・ナイトの悲劇』なる伝記の出版を受け、その欺瞞に満ちた伝記への反駁を企図して、本作『セバスチャン・ナイトの真実の生涯』の執筆を決意し、そしてセバスチャンの足跡を、探偵小説のようにたどっていく。謎の多い兄セバスチャンの死までの行動を紐解いていくうちに、Vはセバスチャンの人生において重要な位置を占める、イギリス人のクレア・ビショップ、ロシア人のニーナ・レチノイという二人の女性の存在を知る。そして、彼女たちと実際に会うことでセバスチャンをより深く知ることになると確信を得て、Vはそれぞれの行方を追い始める、というのが本作のあらすじだ。

結局ヨーロッパでの出版の予定は立たないまま、ナボコフはその原稿をトランクへと詰め込み、それを抱えてアメリカへと渡る。『セバスチャン・ナイト』は1941年にジェームズ・ロフリンが経営するニュー・ディレクションズ社から出版される運びとなり、大喝采とまではいかないながらも、ナボコフは英語作家として一定の評価を受けた。[1]英語作家としてのキャリアのスタートと考えると、これはスムーズなものに見えるかもしれない。しかしながら、英語作家としての心機一転の裏で、ナボコフはロシア語喪失に伴う苦痛を漏らしている。安全な環境での執筆ができるものの、彼は、アメリカに対して慣れ親しんだヨーロッパとは「別な惑星にいるような遠さを感じて」いた（*Selected Letters* 33）。加えて、自身の仕事などあらゆることが英語で行われることに対して、ナボコフはロシア語へのノスタルジアを隠さずにこう語る。「私はこの冬こちらで翻訳、講演の準備、雑誌の仕事と、かつてない量の仕事をこなさねばなりませんでした。すべて英語です。英語だけです。そのため私自身の言語のデーモンは、自分の翼に身を包んだまま座り込んでしまい、時々なつかしい真っ黒な喉の奥を見せつけて大あくびをするのみです」（*Selected Letters* 36）。これらの言葉からは、ロシア語を諦めたナボコフが抱いていた苦悩が垣間見える。

先行研究では、Vとすでに故人となっているセバスチャンの世界の交錯、虚構と現実の曖昧さを指摘するものが多い（Rimmon 115; Boyd 499; Alexandrov

46–47)。あるいは、Vとセバスチャンの関係をナボコフ/シーリンと重ねて捉える見方もある（Cornwell 158; 富士川81)。そのほか、ナボコフと同性愛者であった弟セルゲイとの複雑な関係を読む批評家もいる(Schiff 99)。また、さらに大きなパースペクティブから本作を捉えたものとして、ウィル・ノーマンは、フロベール、ジョイス、フォークナーなどのモダニズム作家との比較を行いながら、現代世界で苦悩する孤高の作家としてのセバスチャンを論じる（Norman 38–40)。アンドリュー・コールトンは、ナボコフ一家がいた1930年代のドイツ国内のナチス政権の台頭による情勢悪化、反ユダヤ主義風潮の高まりが作品のサブテクストとして通底している点を指摘する（Caulton 85–95)。いずれにせよ、『セバスチャン・ナイト』が、ナボコフが英語作家へと転身を果たす過程において、一つの重要な契機を示す作品であることは間違いない（Cornwell 161)。また、舞台として演出される本作が持つ劇場性は、二重の世界の交錯に特徴付けられる、Vとセバスチャンという二つの世界、つまり現実と虚構が、ほどくことができないほど複雑に絡み合いながら、常に互いに顔をつき合わせて並存する（Frank 171)。つまり、Vの語りがいつしかセバスチャンのそれと同一化していく本作の語りの持つ現実と虚構が紡ぐ複雑さ、曖昧さに加えて、ナボコフがシーリンとして、1930年代後半にロシア語作家としての死を迎え、英語作家としての再出発の契機として執筆した本作に、多分に自伝的な要素を含ませたことも見逃せない。

特に本論では、ナボコフが執筆言語との戯れをしばしば「情事」（affair）と女性関係にたとえて語った点に注目したい。『ロリータ』のあとがき、「『ロリータ』と題する書物について」のなかでも、『ロリータ』は「英語という言語」とナボコフとの「情事の記録」であると書いている（*The Annotated Lolita* 316)。実際、『セバスチャン・ナイト』執筆直前、ロシア語を諦めて英語での執筆の道を歩もうかと苦悩していた頃である1936年、ナボコフはイリーナ・グアダニーニというロシア人女性と一つの「情事」を経験している。本論では、ナボコフがすでに名声を確立したロシア語作家シーリンから英語作家へと転身を遂げる過程において書かれた『セバスチャン・ナイト』において、セバスチャンの人生に破滅をもたらすファム・ファタールとして描かれるニーナとの関係を、作中外双方で起こるナボコフの言語的情事に注目しつつ、検討する。

I

Vが異母兄弟であり故人の英語作家セバスチャンの伝記を書くという体裁の本作において、Vの探求の最終目標は、セバスチャンが死の直前に至った「絶対的真実」(*The Real Life of Sebastian Knight* 158; 以下*RLSK*)、つまり生と死をめぐる何らかの答えを明らかにすることだ。1899年ロシアのサンクトペテルブルクに生まれ、1936年フランスで没したセバスチャンの謎に満ちた人生を、残された彼の作品を参照しながらVは探求していく。しかしながら、Vがセバスチャンについて知っていることはほとんどない。1919年にセバスチャンがケンブリッジ大学に入学して以降、彼の死の1936年までに直接出会ったのは1924年、1929年、1936年のわずか3回で、しかも1936年の死に際は、会えたとVが勘違いしていたことが結末で明らかになる。セバスチャンについて無知でありながらも、Vの語りは想像力を駆使してセバスチャンの人生を綴る。すなわち、「様々の沈黙の符牒」(*RLSK* 179)によって形作られる沈黙の世界であるセバスチャンの世界を、Vが極めて主観的な語りによって埋めていくという作業が本作を特徴付ける(Madddox 38–39)。セバスチャンの人生を土地や人を頼りにたどるVの語りは、そこから得た情報を駆使しながらも、そこに現実と虚構の差異はほとんどない。むしろ、Vがその語りの過程で行うのは両者の積極的な交錯である(Rimmon 115)。つまり、Vがセバスチャンの「真実の生涯」として語るのは、実際のところ、V本人の主観的な考察に満ちた彼自身の想像であり、彼が伝記を書くうえで根拠とする出典は、セバスチャンの残した英語小説内のテクストなのである。そして次第に、この伝記が果たして現実なのか、虚構なのかは曖昧となる。セバスチャンの作品は、Vにとっての最大の参照先であり、また彼の人生の出来事を記すうえで、彼の思想や理想を示す傍証となる(Maddox 45)。[2]セバスチャンの作品が、虚構である一方、セバスチャン自身の人生をも表しており、さらにそれを語るVの人生とも重なっていくという、複層性がある。

このような現実と虚構の交錯は、ナボコフの実人生と本作の内容に重なるところが多いことと呼応する。ナボコフとの類似点が多い作家セバスチャンについて語るV自身が、次第にセバスチャンの人生へと奇妙な重なりを見せる。現実と虚構世界が交錯し、現実と思われた事柄が虚構に、虚構と思われた事柄が現実へといつの間にか横滑りしていく本作の構造は、作品内だけにとどまるものではな

く、作品外まで続くメビウスの環を形作る。

Vはセバスチャンの生涯をたどる際の1つの焦点として、彼の多言語性、すなわち英語とロシア語の運用に注目する。母はイギリス人であるが、ロシアに生まれ、そこで教育を受けてきたロシア人であるセバスチャンが、しかし英語作家セバスチャン・ナイトとして、キャリアを積んだという事実を覆そうとするかのように、Vは彼の人生や作品に潜む隠しきれないロシア性をことさらに強調する。そのきっかけは、遺品の整理中、彼の手紙をそのままにして焼却処分しようとしたVが、燃え落ちる手紙の一片を炎のきらめきのあいだに認めたときだ。

> 青色の便箋が一枚解き放たれて、めらめら燃える炎の下を後方へと曲線を描きつつひらひらと舞い上った。黒焦げになってぼろぼろになる寸前、数語が炎の明るい輝きのなかに現れ、それから燃え尽きてしまい、全てが終った。（中略）ぼくが見た言葉はロシア語であり、ロシア語の文章の一部分だった。（中略）ぼくを驚かせたのはその言葉の意味ではなく、その言葉が母国語であったという単純な事実にあるのだ。(*RLSK* 30–31)

Vは、この瞬間に、ロシア語を捨ててイギリス人の母の姓を名乗った英語作家セバスチャン・ナイトのロシア性を見る。正体不明のロシア人女性からの手紙の中に、Vが一瞬見出したこのロシア語の文章は、V自身が述べているように、その言葉の意味ではなく、それがロシア語で書かれていたという事実が、何よりもVに衝撃をもたらす。つまり、非常に遠い、謎の多い存在だった異母兄のセバスチャンとのあいだに、Vはこのときつながりを見出す。その細いつながりの糸をVは少しずつたぐっていく。[3]Vは、セバスチャンのロシア語の美麗な文体と彼の英語とを比較し、セバスチャンが必ずしも英語での文筆に優れていたわけではないことを指摘する。「セバスチャンのロシア語は彼にとって英語よりもはるかに良」く、「彼の英語に見られるよりもはるかに純粋で含蓄豊かなロシア語で書かれている」（*RLSK* 73）のだ。実際、セバスチャンの英語は、少なくともネイティブにとってはいまひとつのものだったかもしれないことが示唆される。Vはセバスチャンの処女作『プリズムの刃先』に対する新聞の書評として、「ナイト氏は分離不定詞がお得意であるのと同様、つまらぬことにこだわるのもお得意なようだ」（*RLSK* 74）という、皮肉な書評を載せている。この嫌味な印象の書評は、

イギリス英語としては不適当とされるセバスチャンの使う分離不定詞を揶揄している。彼が分離不定詞をネタにして皮肉られるのは見逃せない。ナボコフ自身、1936年に、ロシア語長編『絶望』の英語翻訳の際、自身の翻訳草稿をストルーヴェの紹介してくれた英語話者の生徒に渡してチェックを依頼するとき、分離不定詞を探すことになるだろうと冗談めかして伝えているのだ(Boyd 430)。つまり、セバスチャンが揶揄される分離不定詞は、ナボコフにとって、非ネイティヴの英語を特徴付ける一つのトポスだった可能性がある。

さらに、Vはセバスチャンの作品『失われた財産』の一節に、そのタイトルが示す通り、ナボコフ自身が体験した1917年のロシア革命による故国の喪失の苦しみを見出す。

> 親愛な祖国を離れたままでいることが、どういうことかを知悉した人間だけが、郷愁を描きたいという誘惑に陥ることは明らかである。ぼくたちが逃亡した時分のロシアの状況がどんなに恐ろしいものであったにせよ、ぼくたちがみんな経験した祖国とのつらい別離の苦しみを、セバスチャンだけが感じなかったなんて、ぼくには到底信じることができないのだ。(*RLSK* 20–21)

しかしながら、このようなVの分析は、あくまでセバスチャンがそのように感じたに違いないと考えるVの主観であり、そこには最終的にセバスチャンと自身とのアイデンティティの融合を声高に宣言するに至る、セバスチャンとの距離を縮めたいという同一化の欲望が透けて見える。

セバスチャンのロシア性を強調するVの姿勢は、グッドマン氏によるセバスチャンの伝記への反駁も意図されている。グッドマン氏は『セバスチャン・ナイトの悲劇』で、「ロシアにおける教育は、幼い少年に自分の血のなかの豊かな英国人気質を絶えず否応なしに意識させ、(中略)その子供にひどい苦痛をもたらした」(*RLSK* 10)と、セバスチャンのロシア性を否定的に捉え、豊かなイギリス性を強調する。否定されるロシア性というテーマは、セバスチャンとシーリンの類似を想起させる。シーリン自身、新しい世代のロシア文学として評価を受けたにも関わらず、その評価の内容は同時代の批評からも明らかなように、作品の非ロシア性、西ヨーロッパ的な雰囲気が前景化したものだった。ストルーヴェは「シーリンの非ロシア性」(Struve 55; 訳は筆者による)を指摘し、ベルベーロ

ヴァは、「ナボコフは（ロシア国内と亡命者たちの中でも）西欧全体に帰属する唯一のロシア作家」(Berberova 227; 訳は筆者による)として評価していた。しかし、セバスチャンとシーリンの両者ともに、非ロシア的な感性を強く感じさせつつも、故国ロシアへの強い憧憬がある点が共通する。ロシアとイギリス性/英語性の交錯は、セバスチャンとVの同一化、シーリンとナボコフの二重性を考えるうえで見逃すことはできない（Cornwell 157）。

セバスチャンと自身とのあいだをつなぐラインを見つけたVは、「たぶん、セバスチャンとぼくもまたある種の共通のリズムをもっていたのであろう」と結論づける。Vは、「セバスチャンの生涯のさまざまな傾向を辿って行くとき、ぼくを捉える何とも不可思議な「以前に生じたことのある感情」を、もしかすると、これは説明してくれるのかもしれない」（*RLSK* 27）と考えるが、このような自己回帰的な示唆は、Vとセバスチャンの同一性を踏まえるならば、Vによるセバスチャンの人生探求が、VによるV自身への自己言及、あるいはセバスチャンによるセバスチャン自身への自己言及という構造であることを明らかにする。すなわち、Vはセバスチャンという他者を語っている一方で、実際には自身のことを語っているのだ。それゆえ、その探求の過程はデジャヴの感覚とともに経験される。このことは、本作がメタレベルにおいて、英語作家ウラジーミル・ナボコフが、ロシア語作家シーリンとしての自身を、すなわちVがSを語るという自己回帰的構造を持つこととも関連する。現実が虚構を、虚構が現実を互いに境界侵犯し、融けあい、その区別をひたすらに曖昧にしながら交錯していく本作中世界は構築される。

Vがダブルの関係にあるセバスチャンの人生を、既視感を抱きながら再体験するこの過程は、見方を変えれば、Vの語りが健忘症的であるとも言える。なぜなら、Vがもしセバスチャンと同一であるならば、セバスチャンとしてそれをすでに体験しているはずだからだ。それにも関わらず、Vはそれを初めて知ったかのように、他者の経験として語る。Vの記憶喪失的な追憶と再体験によって、セバスチャンが持つロシア性が明らかになっていく過程は、一度はセバスチャンがロシア性/語を忘れようとしていた事実を想起する（*RLSK* 73）。セバスチャンは自身のロシアを忘れようとしていた。しかし、本作終盤にかけて、セバスチャンの人生を徐々にロシア的なものが満たしていくことからも明らかなように、それが容易に忘れられるようなものではないことが強調される（*RLSK* 73）。[4] Vは謎め

いた兄の人生を紐解くことで彼を理解し、そこに自身と同様に亡命からくるロシア性/語への憧憬を見出し、そして最終的には、その距離を克服し、彼我との同一化を目指す。セバスチャンの英語に混じるロシアへの隠しきれないノスタルジア、複雑な想いを見出すVの姿勢は、ロシア語を最終的には諦めざるを得なかった作家シーリンとしてのナボコフの喪失感を暗示する。

II

セバスチャンの持つロシア性を見出しつつ、Vは彼の女性関係を探り始め、セバスチャンが関わりを持った女性たちの行方を追い始める。そして、重要な二人の女性イギリス人のクレア・ビショップとロシア人のニーナ・レチノイの存在をVは知ることになる。[5] クレアは、ナボコフの妻ヴェーラとの類似がしばしば指摘される。クレアとヴェーラの類似は、作家であるパートナーの執筆の補佐という役割に顕著だ。ヴェーラがナボコフの手書きの草稿をタイプライターで清書し、タイポや文法に訂正を入れていたのと同様、クレアもタイプライターでセバスチャンの口述筆記を行う。「彼女はタイプを習得していた。それで一九二四年の夏の夜は、彼女にとって、毎晩タイプ用紙をホールダーの隙間に滑り込ませ、それが黒色やすみれ色にタイプされた言葉をぎっしり詰めてふたたび滑り出てくるということの繰り返し」だった（*RLSK* 72）。また、シフはセバスチャンの文章を訂正するクレアのセリフにヴェーラとの類似を見る。セバスチャンが口述する作品をタイプしながら、その時おりで、クレアは、

> キイを打つ手を休めて、押し込んである用紙の外にはみ出た端の部分をちょっと持ち上げ、タイプされたばかりの一くだりを読み返しながら、心持ち眉をひそめて、「違うわ、あなた。英語ではこんなふうには言えないものなのよ［原文では“You can’t say it in English”］」と、口癖のように言っていた（後略）。（*RLSK* 74）

クレアがセバスチャンの英語の違和感を指摘する時のこのセリフは、ヴェーラがナボコフの草稿を見て、「そんなふうには言えない」(“you can’t say that”) と言っていたことを想起させる（Schiff 52）。加えて、ここでもやはりセバスチャンの

英語が非ネイティヴスピーカーのそれであることが示唆される。「英語ではこんなふうには言えない」というクレアの言葉は、セバスチャンの思考のベースがロシア語であり、それを英語へと翻訳するようなかたちで文章化されていることを含意する。英語では意味をなす文章とはならなくとも、しかしセバスチャンの頭の中、ロシア語で紡がれる世界では、それは自然な文章として構成されているのではないか。

クレアがセバスチャンの執筆を手助けするように、ナボコフの作家としてのキャリアにおいてヴェーラがなくてはならない存在だったことは、シフのヴェーラ伝でも明らかである。しかしながら、ヴェーラ自身は自分の名が公の場に出ることをあまり好ましく思ってはいなかったようだ。[6] ナボコフは、ヴェーラとの結婚を迎える直前、彼らの関係はまるで「シャム双生児」であると妹エレーナに手紙を送っている（Schiff 46）。「シャム双生児」は、夫婦の間柄を表す表現としてはいささか奇妙に思われるが、しかし何よりも創作に重きを置くナボコフにとって、家族としてももちろんであっただろうが、タイピングも含めて事務的な仕事に不得手であった彼の執筆になくてはならないパートナーであったヴェーラは、まさに自らの半身であり、分かち難い存在であっただろう。[7] 実際、本作の草稿全体にヴェーラによる大量の手直しが加えられていたことを踏まえるならば（Schiff 97）、本作の執筆においてヴェーラが果たした役割は小さくないだろう。この意味でも、ナボコフとヴェーラは一心同体の間柄にあった。

ナボコフとヴェーラは生涯ともに暮らしたが、一方で、セバスチャンはクレアを捨て、ロシア人女性ニーナの元へと向かう。ニーナの正体は、ヒントは多く与えられるものの本作における最大の謎として結末直前まで伏される。Vが最初に得る手がかりは、1929年6月にフランスのブラウベルグにあるボーモント・ホテルでセバスチャンがニーナと出会ったということだ（これを知った段階ではまだ名前もわかっていない）。本作はセバスチャンの生涯を追うものであると同時に、彼の人生に大きな影響を与え、また彼が破滅する一つの起因となったこの謎の女性ニーナの行方を追う探偵小説でもある。

Vはセバスチャンの手がかりを求めて旅をする途中、列車でジルバーマンという探偵業らしき仕事をしている男性と出会う。彼にその謎の女性の行方を捜していると伝えると、ジルバーマンは、その後どのような手段を用いたかは語られないが、Vにその時期にホテルに滞在していた宿泊者のリストを届ける。そこから

Vは、候補となる4人の女性をピックアップし、個別にその行方を尋ねていく。[8] ニーナは、その内の一人へレーネ・フォン・グラウンの友人ルセール夫人として正体を偽ってVの前に現れることになる。

ニーナの存在は、Vが出会う画家ロイ・カーズウェルによるセバスチャンの肖像画に象徴的に表される。

> ナルシスのように透明な水のなかに映っているという印象を与える――その透明な水のなかには、ちょっと泳ぎをやめ、後向きに浮流している水蜘蛛がいるために、こけた頬の上のところに、ほんのかすかにさざ波が立っている。（中略）
>
> 「ぼく［カーズウェル］はねえ、どこか彼の背後か彼の手の届かぬところにいるある女のことをそれとなく暗示してみたかったんですよ――たぶん、その女は手の影みたいなものだったのでしょう（中略）。
>
> その女は彼の生活を滅茶苦茶にしてしまったのですよ。これでその女を要約したことにはなりませんか」
>
> （中略）
>
> 「ぼく［V］はあの浮流している蜘蛛がとても気に入りました。特にそのえび足の影が下の方に映っているのが」(*RLSK* 104–105)

カーズウェルによる肖像画は、本作において最も重要な手がかりの一つだ。ここで、水面をのぞきこむナルシスのように描かれるセバスチャンの肖像によって、彼の存在がVとの鏡像状態にあることが示される一方、セバスチャンの破滅の原因（原文では“femme fatale”）としてニーナの存在が示唆されている。ナボコフ作品には、例えば『カメラ・オブスクーラ』（1936年）の美女マグダや『ロリータ』（1955）のロリータなどファム・ファタール的な女性が登場するものがいくつかあるが、本作においてニーナがそのような存在として描かれる。

セバスチャンとニーナの関係は、ナボコフが1937年にパリで出会ったイリーナ・グアダニーニという女性とのそれが基になっていると考えられる。イリーナの一家は、ナボコフと同じロシアはサンクトペテルブルクの上流階級に生まれ、彼の父ウラジーミル・ナボコフと同じ政治派閥に属していた。彼女の継父の兄弟の一人はロシア革命の際にボルシェビキに捕らえられ、1918年に処刑されてい

る。亡命後ベルギーで出会ったロシア人男性と一度結婚したがその後別れ、パリで暮らしていた（Boyd 433）。イリーナはブロンドの美人で高い教養を持った女性だった。詩の暗誦もできたことからナボコフとはすぐに意気投合し、情事が始まったようだ（Boyd 435）。ニーナとイリーナの両者は共通の性質で描写される。ナボコフの友人で同様に亡命ロシア人作家マーク・アルダーノフは、イリーナのことを「ファム・ファタール」だと評していた（Schiff 87）。[9]

イリーナと出会い、ナボコフは二重生活を始めた。当時ナボコフは一人でパリに赴き、そこへの移住も模索しながら出版社に自作の売り込みをしつつ、朗読会や講演会を行っていた。その間、ヴェーラはベルリン、その後プラハで仕事をしつつドミトリイを育てていた。ナボコフとはしばし離れ離れになっていたヴェーラは、彼の情事を知る由もなかったが、パリから届いた（明らかにロシア人の手によって）フランス語で書かれた匿名の手紙によってナボコフとイリーナの関係を知る(Boyd 438)。[10]1937年カンヌへと一家揃って移った時、ナボコフはヴェーラに自らイリーナとの情事を打ち明け、彼女との関係を絶つことを約束し、ヴェーラと変わらず暮らすことになる。しかし、ナボコフはヴェーラに嘘をつきつつ、一方でイリーナとの文通を密かに続ける二重生活を依然として送った。この時、ナボコフが偽名としてイリーナに指示した偽の宛先が“V. Korff”、ナボコフの父方の曾祖母の姓であった。そして、その曾祖母の名がまさしくニーナなのだ（Schiff 88）。

このナボコフの欺瞞と裏切りを、ヴェーラが彼の言語への喪失感ゆえに起こしたものだと考えていた点は、『セバスチャン・ナイト』を読む上でも興味深い。ヴェーラは、「ナボコフがしたことは、ロシア語への熱い情事を打算的な結婚で塗り替えようとしたところ、そのような結婚につきもののように、想いのこもった愛の情事へと置き換えてしまうことだった」と考えていた（Schiff 98）。文字通りに読むのであれば、ヴェーラのこの考えは、ナボコフが愛するロシア語から英語へと転向を果たしたことを情事のメタファーで表したに過ぎない。しかしながら、ヴェーラがナボコフとイリーナとの関係を知っていたことを踏まえるならば、ここにそれ以上の含みを見出さずにいるのは難しい。ナボコフと愛するロシア語、そして新たな恋人となる英語とのあいだの言語の情事は、彼がまさにその二言語のあいだで葛藤していた1930年代後半のこの時期に起きた彼とイリーナとの関係を想起させる。結局、ナボコフはイリーナとの関係を諦め、ヴェーラと

の結婚生活を続けることになったが、イリーナへの気持ちも決して偽りではなかったナボコフにとって、最終的にこれまでのヴェーラとの結婚生活を省みて何よりも重要だったのは、彼女が彼の創作について熟知していることだった。作家ナボコフはヴェーラがいなくては生きていけず、そのサポートを通じて、ヴェーラが「シーリン」から「ナボコフ」という作家を作りあげたと言うのも決して過剰な評価ではないだろう（Schiff 49, 87）。

パートナーのクレアを捨て、ニーナの元へと走ったセバスチャンの破滅の原因は物語の終盤で明かされる。ルセール夫人の正体がニーナだとVが知る場面で、セバスチャンと謎の女性ニーナとの情事に、これまで強調されてきたセバスチャンが追い求めたロシア語/ロシア性の問題が絡んでいることが示唆される。ルセール夫人の正体が実はニーナなのではないかと疑ったVは一計を案じて彼女を罠にかけ、その正体を見破る。二人で出かけた公園で、たまたまそばにいたロシア人の男性にVはロシア語で「蜘蛛が首のところに」と小さく声をかける。

> 「何ですって？」ぼくのほうをちらっと見やりながら、愚鈍なその同国人が訊いた。それから彼は夫人に目をやり、にやっと笑って、懐中時計をまたいじくり回しつづけた。「首のところに何かいるわ。そんな感じがするわ」とルセール夫人が言った。「実は」と僕は言った。「あなたの首に蜘蛛が這っていると思ったものですから、このロシアの方にそう申し上げたところなんです。でも、それはぼくの勘違いでした。光線のいたずらだったのです。（中略）ぼくはちょっと試してみたのです。そしてぼくが呟いたロシア語の文章を、あなたが無意識のうちに聞き取られたとき……」(*RLSK* 151–52)

Vはロシア人の男性に向かってロシア語で首に蜘蛛がいると話しかけるふりをすることで、実はロシア語がわかるにも関わらず話せないふりをしているルセール夫人ことニーナを騙す。彼女はロシア語が聞き取れるがゆえに、Vがロシア人の男性に向かって発した言葉が自らに向けて発されたものだと勘違いするのだ。ここで、すでにカーズウェルの肖像画でセバスチャンとともに描かれていた蜘蛛が、ルセール夫人のロシア性を暴く重要なキーワードになって再登場し、この蜘蛛が、セバスチャンとロシア語、そして彼の情事の相手、ニーナを結びつけるのだ。[11]

セバスチャンとクレアの関係が、ナボコフとヴェーラのそれに重なるのであれ

ば、クレアとの関係を絶ってしまったセバスチャンの死は、ナボコフが経験せずに済んだ作家の擬似的死の訪れを示唆する。最終的にロシア語の戯れによって明らかにされる、セバスチャンのニーナへの入れ込みが彼のロシア語/ロシア性への偏向を示唆するように、ナボコフが言語との戯れを情事とたとえ、それをヴェーラがイリーナとの関係を思わせる言葉で語るとき、ロシア語、そして英語と二重の関係に苛まれたナボコフが、『セバスチャン・ナイト』において、自身のロシア語の喪失を、イリーナとの情事を想起させる、セバスチャンとニーナとの情事というかたちで描きなおしたことが明らかになる。そこには、シーリンの死、すなわちロシア語作家としてのナボコフの象徴的な死が、ニーナを追い、ついに病で亡くなるセバスチャンの人生にメタフォリカルに表れる。そして、セバスチャンの死のあとに彼と一体となったVが、新たに英語で『セバスチャン・ナイトの真実の生涯』を書いているという設定こそが、まさしくシーリンの死のあと、そこから英語作家ナボコフが初の英語長編として本作を書く過程と重なる。

セバスチャンの死が彼岸への門出として描かれる点は見逃せない。彼の遺作である『疑わしい不死の花』において、死を彼岸への新たな旅立ちとして、船出のメタファーで語る。

> 彼岸の問題――別離や死別のつらい悲しみ。見送人たちがハンカチをひらひら降っている人生の桟橋からの静かな門出。ああ！　もし海岸が後へ退いて行くのが見えるとしたら、彼はもうすでに彼岸に到達しているのだ。（中略）それから少しずつ身体に取り憑いた病気という悪魔が、大量の苦痛をもたらし、ありとあらゆる種類の思想、哲学、憶測、記憶、希望、後悔を窒息させてしまうのだ。（*RLSK* 155–56）[12]

アレクサンドロフは、この船出を本作中における「異界」(“otherworld”)のテーマとして捉え、彼岸、すなわち死後世界を垣間見たセバスチャンとVとの霊感的なつながりが、死の超克へと至ることを指摘する（Alexandrov 142）。それだけにとどまらず、彼岸への航海は、ナボコフの人生を考えると単なるメタファー以上の意味を持つ。来るべきヨーロッパから彼岸、つまりアメリカへの移住が、ロシア語作家から英語作家へとナボコフが転向する過程であり、象徴的にロシア語作家シーリンの死を想起させると同時に、ヨーロッパで書かれた本作が、渡米後

1941年にアメリカのニュー・ディレクションズ社から出版されるに至る旅路と重なる。これは、一度は現代ロシア文学の旗手とまで評価されたロシア語作家ウラジーミル・シーリンが一度死を迎え、そこから英語作家ウラジーミル・ナボコフとして新たなにはばたく旅路だ。セバスチャンの死からVは、「一つの秘密を知った。それはつまりこういうことなのだ。魂は存在の様態にほかならない――しかも一定不変の状態ではない――ということおよび、いかなる魂でも、その魂が描く波動を見出し、それを追求して行けば自分のものになるということ」だ（*RLSK* 180）。ロシア語作家シーリンから英語作家ナボコフへと、「一定不変の状態」を捨て、その「存在の様態」の重要さを知ったVは、ついにセバスチャンとの同一化を果たす。「ぼくはセバスチャンなのだ。あるいは、セバスチャンがぼくなのだ」(*RLSK* 181)。ここには、ロシア語を諦めつつもシーリンとしてのアイデンティティと英語作家としての不安定なアイデンティティとのあいだで折り合いをつけるナボコフの姿がある。その意味において、これはまさに「作家の死」と、そこからの再生と新たな旅路の始まりなのだ。

結

ナボコフがロシア語と英語という二つの執筆言語のあいだでの葛藤を、しばしば「情事」（affair）と女性関係にたとえて語っていたことは、本作の読解においては、単なるメタファーとだけ捉えることは難しい。政治情勢の悪化などの理由から、ロシア語作家としてのキャリアを諦めざるを得ない1930年代後半、彼が英語での執筆の道を歩もうかと苦悩していた時期に、イリーナ・グアダニーニと一つの「情事」を経験していることは、ナボコフの「情事」が必ずしも言語だけのそれではなかったことを意味する。ナボコフの「情事」は、言語と女性を巡ってこの時期に大きく展開を見せた。

『セバスチャン・ナイト』において、Vがセバスチャンの人生を健忘症的なナラティヴで再体験し、その謎を解く過程において、Vはセバスチャンが忘れようとしながらもそうすることがついぞできなかった、彼のロシア語/ロシア性を感じとり、それが容易に忘れられるようなものではないことを看破する。セバスチャンとのあいだにあった距離を克服し、彼との同一化を目指すVは、セバスチャンの英語に混じるロシアへの隠しきれないノスタルジア、複雑な想いを掘り起こ

していく。

その過程でセバスチャンの女性関係に目をつけたVは、セバスチャンとクレアの関係、そしてニーナという謎のロシア人女性の行方を追い、ついに英語作家セバスチャン・ナイトとニーナとのつながりを、ロシア語の「蜘蛛」の戯れを通じて明らかにする。セバスチャンとクレアの関係、そしてニーナとの情事が、それぞれナボコフとヴェーラ、イリーナとの関係を思わせる構図で語られるとき、ロシア語、そして英語と二重の関係に苛まれたナボコフが、自身のロシア語の喪失と英語との新たな情事の始まりを、セバスチャンとニーナとの情事というかたちで逆照射したと解釈できる。ロシア語作家シーリンとしての死が、ニーナを追い、ついに亡くなるセバスチャンの人生に表れる。セバスチャンの死後、Vが英語作家として、『セバスチャン・ナイトの真実の生涯』という伝記を書いているという本作中の設定こそがまさしく、英語作家ナボコフがシーリンの死を乗り越えて、初の英語長編としての本作を書く過程に重なる。

そして、セバスチャンの彼岸への航海は、ナボコフがヨーロッパからアメリカへの移住を経て、ロシア語作家から英語作家へと転向する過程、すなわち象徴的なロシア語作家シーリンの死を想起させる。ロシア人亡命コミュニティで、最も優れた作家とまで評されたウラジーミル・シーリンは、やむをえず一度死を迎え、そこから英語作家ウラジーミル・ナボコフとして新天地アメリカへたどり着く。二人の女性のあいだで葛藤しながら、一方でロシア語と英語との言語的情事を繰り広げつつ作家としての自身の生き方を苦悩したナボコフの二重生活が、Vによるセバスチャンの生涯の探求、最終的な同一化に表れているのだ。

註

1　『セバスチャン・ナイト』出版までの経緯とそれをめぐる議論については、秋草俊一郎『アメリカのナボコフ』を参照（77–142）。

2　セバスチャン作品の登場人物の名がVが出会う人々に重なる（富士川 71–72）。

3　「ロシアにおける教育は、幼い少年に自分の血のなかの豊かな英国人気質を絶えず否応なしに意識させ、（中略）その子供にひどい苦痛をもたらした」（*RLSK* 10）と、セバスチャンのロシア性を否定的に捉え、豊かなイギリス性を強調するグッドマンによる伝記『セバスチャン・ナイトの悲劇』への反駁でもある。

4　晩年のセバスチャンはロシア語で手紙を書き、ロシア人医師にかかり、死を迎えるサナトリウムにはロシア姓（父親の方でありVと同一の姓）で入院するなど、自身のロシア性へと向かう傾向にある（Cornwell 160–61）。

5　ニーナの旧姓はToorovetzであり、“toora”あるいは“tura”はロシア語でチェスのルークを指す(Alexandrov 152)。セバスチャンがナイト、クレアがビショップ、ニーナがルークというようにこの三者がチェスの駒の名前によって密接な関わりにあることが示唆される。

6　シフはヴェーラの自己滅却（“self-effacement”）の性格を指摘しているが、これは必ずしも否定的なニュアンスではないだろう。実際の理由は今となっては定かではないが、表に出ることを嫌ったヴェーラは、ナボコフというマスクを被って語るという役割を持ったのだろうとシフは論じている（Schiff 73）。

7　ナボコフは煩雑な番号を覚えることや手続きを嫌っており、郵便や電話などの通信サービスの扱いが苦手で、出版社、編集者とのやり取りや手紙の代筆などの事務的な事柄の処理は、ヴェーラの助けを借りずにはままならなかった（Schiff 51）。

8　候補者はセバスチャンが会いにいく順に次の4人。ヘレーネ・グリンシュタイン、マダム・ド・レチノイ、リディア・ボヘムスキー、ヘレーネ・フォン・グラウン。この中でニーナの正体は、マダム・ド・レチノイだが、彼女の家を訪れたVは彼女に会うことが叶わないままになる。その後ヘレーネ・フォン・グラウンに会いに行った際、不在の彼女に代わって、友人のルセール夫人という女性がVを迎える。このルセール夫人こそが、2番目に訪れたが結局会えないままになっていたマダム・ド・レチノイ、旧姓ニーナ・トーロヴェッツである。

9　また、モダニズム文学史の中で本作を位置付けるウィル・ノーマンは、イリーナをフラッパー的女性と論じている（Norman 45）。

10　ボイドはこの手紙の送り主について特にコメントをしていない。シフはもともとナボコフとイリーナを引き合わせた彼女の母ヴェラ・ココーシュキンか、あるいはナボコフ夫妻と親交があり、ヴェーラに好意を抱いていたと言われる作家イリヤ・フォンダミンスキーの可能性も囁かれたが、文章のスタイルからしてこの説を否定的に見る。何よりナボコフはその才能ゆえもあり、文壇にたくさんの敵がいたようだ（Schiff 86）。

11　さらにこの蜘蛛の影にナチスの鉤十字を読む研究を踏まえるならば、ここで蜘蛛が示唆するセバスチャンの背後に潜む破滅的要素は、女性、言語だけではなく、1930年代のナチスによる人種優生学的イデオロギーの推進と、ヴェーラとドミトリイがユダヤ人であったことが想起させる。セバスチャンが患っているというリーマン病が疾病ではなく、人種的病気、つまりナチスが定める劣等人種としてのユダヤ性を示唆すると論じる研究もある（Caulton 89）。

12　ナボコフがアメリカへ渡った直後、時々自らのうちで鎌首をもたげる「私自身の言語のデーモン」の存在がこれに重なる（*Selected Letters* 36）。

引用文献

Alexandrov, Vladimir E. *Nabokov's Otherworld*. Princeton UP, 1991.

Berberova, Nina. "Nabokov in the Thirties." *Nabokov: Criticism, Reminiscences, Translations & Tributes*, edited by Alfred Appel, Jr. and Charles Newman, Northwestern Press, 1971, pp. 220–33.

Boyd, Brian. *Vladimir Nabokov: The Russian Years*. Princeton UP, 1990.

Caulton, Andrew. *The Absolute Solution: Nabokov's Response to Tyranny, 1938*. Peter Lang, 2013.

Cornwell, Neil. "From Sirin to Nabokov: the Transition to English." *The Cambridge Companion to Nabokov*, edited by Jullian W. Connolly, Cambridge UP, 2006. pp. 151–69.

Frank, Siggy. "'By Nature I am no Dramatist': Theatricality in Nabokov's Fiction of the 1930s and 1940s." *Transitional Nabokov*, edited by Will Norman and Duncan White, Peter Lang, 2009, pp. 167–84.

Khodasevich, Vladislav. "On Sirin." Page, pp. 61–66.

Maddox, Lucy. *Nabokov's Novels in English*. U of Georgia P, 1983.

Nabokov, Vladimir. *The Annotated Lolita*. Edited by Alfred Appel, Jr., Penguin, 2000. 若島正訳『ロリータ』新潮社、2006年。

—. *The Real Life of Sebastian Knight*. 1941. Penguin, 2011. 富士川義之訳『セバスチャン・ナイトの真実の生涯』講談社、2016年。

—. *Selected Letters 1940–1977*. Edited by Dmitri Nabokov and Matthew J. Bruccoli, Vintage, 1990. 江田孝臣訳『ナボコフ書簡集1 1940–1959』みすず書房、2000年。

Page, Norman, ed. *Vladimir Nabokov: The Critical Heritage*. Routledge, 1997.

Rimmon, Shlomith. "Problems of Voice in Nabokov's *The Real Life of Sebastian Knight*." *Critical Essays on Vladimir Nabokov*, edited by Phyllis A. Roth, G. H. Hall, 1984, pp. 109–29.

Schiff, Stacy. *Véra (Mrs. Vladimir Nabokov)*. 1999. Modern Library, 2000.

Struve, Gleb. Review of Sirin's Works. Page, pp. 47–56.

秋草俊一郎『アメリカのナボコフ——塗りかえられた自画像』慶應義塾大学出版会、2018年。

富士川義之『ナボコフ万華鏡』芳賀書店、2001年。